金剛院日与『法華和語記』について

糸久宝賢

『法華和語記』全四巻（以下『和語記』と略称）は、日隆門流の両山（尼崎本興寺、京都本能寺）六世、金剛院日与の著したものである。日与は「両山中興の祖」また「内外典及び歌道に達し」た人と『両山歴譜』に記される、室町期日隆門流を代表する僧侶のひとりである。日与の生涯とその文芸活動については、かつて桃井観城師が触れられ[1]、また、これをうけて「本興寺・本能寺両山六世金剛院日与とその周辺」（『大崎学報』一三七号）の中で小考を加えたことがある。その論考の中で、門流運営者としての日与の業績と、歌人僧としての活躍を述べた。本稿はさらに日与の著作である『和語記』をとりあげ、彼の文芸活動を京都日蓮教団・門流の発展との関りの中で再考しようとするものである。

日与の生涯における文芸活動を素描すると

康正・長禄頃（一四五五～五九）　本能寺で興行された祝禱連歌に参加。

文明九年（一四七七）　杉美作守重道の陣所において興行された連歌に参加。

文明十五年（一四八三）　本能寺において興行された連歌に参加。

文明十八年（一四八六）　宗祇発句の連歌に参加、本能寺において連歌興行。

延徳二年（一四九〇）　日与の坊で「七人付句」開催。

といった事跡があげられる。こうした、歌人僧としての日与の著作のひとつである『和語記』は、その名の示す如く、法華経の二十八品ごとに先人の和歌をあわせ記したものである。『和語記』は延徳二年（一四九〇）十月五日に著されたものである。『日蓮宗宗学章疏目録』によれば、正、写本は伝存しておらず、正保四年（一六四七）十一月の刊記本が現存するという。かかる事情から、本稿でテキストとして用いるのは、正保四年刊記本とすることをあらかじめお断りする。

『和語記』は全四巻四冊で

第一巻　序品～信解品

第二巻　薬草喩品～見宝塔品
第三巻　提婆達多品～法師功徳品
第四巻　常不軽菩薩品～普賢菩薩勧発品

に分巻収録され、全文仮名漢字混交文である。原文の体裁は不詳。構成をみると、品々ごとにまず一品の大意を述べ、その大意にそった先人の和歌を作例としてあげ、次で品々の題号釈を記し、ここでも先人の和歌を引いて作例としている。この部分までは一品全体を通して題材をとることに際しての心得であるが、次下に記されているのは「要文の事」というもので、品々の中にある著名な章句を列記し、この章句を題材として和歌を作る心得が述べられている。先人の和歌を作例として引用するのは前の部分と同様である。品々の教理解釈については、日与自身があとがきに

記す所は明師の高判也　作者の私を存ぜず　但し題号之解釈を引て入文を消し　玄義止観をもて文句に合せる事は　是又妙楽大師の指南也

と記すように、彼自身の解釈ではなく、主として天台三大部及び妙楽大師の釈を句々にそえて示したものである。また、引用所載の和歌の作者としては慈円が最も多く、俊成・赤染衛門・定家をはじめとする作者達の作品を載せ、全体で百余箇所、二百首弱の和歌を引用している。このように『和語記』の内容は教理的著作というよりも、法華経をテーマとする釈教歌作成の手引書としての性格を強く有するものとなっている。このことは、日与とほぼ同時代に活躍した円明院日澄（一四四一～一五一〇）の『法華啓運鈔』が、基本的には天台教学の典籍の釈を句々にそえるという形式をとりながらも、諸処に日蓮遺文・私見を合し、日蓮宗宗義書の性格を有するものになっていること[2]と比較すればより明確となろう。『和語記』のかかる性格は、その述作されるに至った経緯にも関連があると思われる。

『和語記』を述作するに至った経緯について巻頭には

これは一品経のためとて人々のかたより品々のこころをたずね給いし時　俄にあらあらしるして送る事十品計におよべり　其後整足してしるし侍らばやと思ひ

と記されている。すなわち『和語記』に先立って同内容のものをなんびとかの依頼によってまとめたが、それは一部分十品ばかりであったので、改めて一部八巻二十八品全てについて注釈を加えたというのである。『和語記』は当初から、法華経の大意を知る（作歌の手引きとして）ために、また、他からの依頼によって著されたものを補促したものであった。

このような依頼がなされるには、日与自身「人々のかた」からある程度の評価が与えられていたことを前提とするであろう。略年表に記した如く彼の文芸活動の全ては連歌である。この頃の連歌ブームが公式・仏教教団諸方に広がってい

たことは既に先学の指摘する如くであって、日蓮教団もまたこの例外でなかったことは、日与の略年表からも、他の史料からもうかがわれるのである。京中諸山は著名な連歌師や、連歌に明るい貴族を招いて連歌を興行した。[3] いっぽうこうした傾向は京中の寺院のみならず地方の教団寺院にも見られるところであり、富士門流大石寺日有談『化儀抄』第三十九条では

一、法楽祈禱なんどの連歌には寄り合はず、其故は宝号を唱なへ三礼を天神になす故に、信が二頭になる故に我宗の即身成仏の信とはならざるなり云云[4]

として、連歌に寄り合うことを禁じているが、これも日蓮教団内の連歌ブームを示す一例といえよう。こうした連歌ブームの中で撰集された『新撰筑玖波集』は、それを知る人々の強い注意を引いたというが、日与の才能をきわだたせているのは、この『新撰筑玖波集』に彼の作品が入句していることである。このことは前掲拙稿並に「室町時代における法華宗僧の文芸活動について—京都法華宗の性格把握の視点から—」(『印度学仏教学研究』三十二—二号)において述べたところであるが、再度略述すると次の如くである。

木藤才蔵氏によれば、この連歌集は大内左京大夫政弘の発願により、一条冬良が中心となり、三条実隆の指揮下、宗祇が主幹となって編集され、永享初年から明応四年にいたる六十年余の作品群の中から選ばれた作品によって構成されており、宮中作家、武家、僧侶などがその作者であるという。また、選出の傾向として、専門作者の作品を中心としていること、それ以外は宮中作家の作品を多くとり、宮中の地位関係が考慮されていること、などがうかがわれるという。[5] いっぽう、編集方針をめぐって編者間でトラブルがあったこと、編集がはじまると盛んな入選運動がくりひろげられたことなども指摘されている。[6] そうした背景のなか、『新撰筑玖波集』に入句している日蓮教団寺院の僧は、妙蓮寺日応と日与の二人で、日応は三句、日与は十一句入句している。専門連歌師や宮中作家たちからみれば、日与の十一句というのは少ないように思えるが、殿上人から五位までの人々でさえ十句を越えるのはまれであるし、地下人や一般僧侶にいたっては、ほとんど一〜五句程度の入句であるから、[7] これに比較すれば日与の入句数は少ないものではない。

略年表に記した如く、日与と編集主幹の宗祇とは、日与が自身の坊に宗祇を弟子と共に招くほど親密で、師弟に近い関係を有していたのではないかと思われるほどであり、後述するように、編集の中心人物であった一条冬良とその父兼良と、日隆門流とは交渉があって、そしてまた、日与の代に本能寺は将軍家祈禱所となっている。こうしたことも入句数に無関係ではないであろうが、それにしても、著名な宮中作家で

も、専門連歌師でもなかった日与に与えられた才能の評価は、先に掲げた入句数を基準とするならば、必ずしも低いものとはいえないであろう。

こうしてみるならば、歌人僧としての日与に、『和語記』の内容の如き質問が寄せられるほどの評価は、彼の社交圏の中で与えられていたであろうと考えられる。加えて、日与は若年の頃より当代知識人との交渉をもち、長禄四年（一四六〇）には一条兼良のもとで法華要品の講義をしている。兼良はこれに

本能教寺苾蒭日定講二説法華要品一最以二本門之所詮一為レ宗、以二末世之弘通一為レ先　厥利寔莫大焉、其志寧不レ嘉耶[8]

との感状を与えているが、これも日与への評価を知る一端であろう。この頃本能寺で興行された祝禱連歌に兼良の発句が送られたのもこうしたことと無関係ではあるまい。

以上が『和語記』の構成・著述の経緯並びに日与と『和語記』との関連であるが、もう一点注目されるものとして、『和語記』の奥書がある。

『和語記』には日与の自筆奥書の次下に「前博陸」すなわち前関白が奥書を記めている。それは

妙法蓮華経註釈諸宗之所述者不可勝計其中以天台釈為肝心歟　故賜法華号唯在一宗□雖然如白屋児女子輙難通釈義歟（略）一見之次聊勒筆端而已

永正元年仲夏初吉

前博陸候　在判

というもので、日与入寂後十三年後のことである。『和語記』を「前関白」の許に届けて奥書きを依頼したのは、おそらく日与の後職日僧であろうと思われる。日僧は奥書にある年号と同年の永正元年三月、日与の『法華経大意』を三条実隆の許に持参せしめている。『法華経大意』は『日蓮宗宗学章疏目録』にはその名が見えず、『両山歴譜』日与上人の条に「三帖抄　妙経大意」と、『三帖抄』の異称で記されている日与の著作である。『実隆公記』永正元年三月二十七日条には

本能寺故日誉所抄之法華経大意為和歌述其義、有五巻、此本予加一覧、和歌内有相違之事者有可改付之由、彼寺当住命之由伝之、何様為結縁預置之由報了

とあって、『法華経大意』五巻が届けられ、所載の和歌の校訂を依頼されたと記されている。日僧自身明応四年（一四九五）四月に、一条冬良のもとで法華要品の講義をして感状をうけたという事蹟[9]があり、公武との交渉のあった人であるから、『和語記』もまた、そうしたなかで「前関白」に届けたものであろう。

ところで、『和語記』奥書にある「前関白」についてであるが、永正元年の時点で存命していた関白経験者を『読史備要』『公卿補任』によってみると

一条冬良　永正十一年（一五一四）没。
近衛尚通　天文十三年（一五四四）没。
鷹司政平　永正十四年（一五一七）没。
近衛政家　永正二年（一五〇五）没。
九条政基　永正十三年（一五一六）没。

の五人である。このうち一条冬良については前述の通りであり、近衛政家、尚通父子は日蓮宗信仰をもった貴族として著名である。[10] また、鷹司政平は、その子息某を京都妙顕寺で出家させており、[11] この四人は、直接本能寺や京都日蓮教団寺院と関りの深い貴族たちである。九条政基についても、直接ではないが、兄弟の九条政忠の子息（後の立本寺七世要法院日禅）が日蓮教団寺院に入寺しているという関係[12]である。こうしてみてくると『和語記』に一見を加え、奥書を記めた可能性のある人物は、いずれも何らかの形で日蓮教団と関わりをもっていたということになろう。

それにしても、単なる遇然であるかもしれないにせよ、日僧は何故同年中に日与の著作二点を当代を代表する知識人、高位の人に閲せしめたのであろう。前年が日与の十三回忌だったので、これを期して日与の遺著をまとめておこうと思ったのであろうか。あるいはまた、先代日与や日蓮教団の有していた社交圏を手がかりとして、彼自身も本能寺貫主としてそうした階層と交渉をもつことを継続する必要があったのであろうか。この点、にわかには詳かにしがたいところであるが、京都日蓮教団各本寺の貫主に貴族の子弟を迎えることはまれなことではなかったし、[13] 本能寺でもこののち、貫主に伏見宮連枝の出身である日承を迎えているのであるから、[14] 日増及本能寺が、それらの階層と交渉をもつことに、全く無関心であったとは言いきれないのである。

以上の如く『和語記』に関する事項を述べたのであるが、『和語記』の執筆も彼の文芸活動と同様、教団外の社交圏の中でなされたもののようである。そうした日与の社交圏が門流運営者としての彼の事歴に無機能のままでいたとは思えないし、その一端は後職日増にも継承された。

法華経の教理を一般教養として知りながらも、あまり宗派性を意識しなかったであろう人々の中にあって、『和語記』もまた、日与の文芸活動と同様、結果的にそれらの人々と日与とをつなぐ接点のひとつだったのではないだろうか。

1　同氏稿「金剛院日与上人について」（『桂林学叢』第一号所収）。
2　渡辺宝陽氏『日蓮宗信行論の研究』一七四～一九〇頁。
3　拙稿「室町時代京都日蓮教団と貴族」（『日蓮教学研究所紀要』第九号所収）を参照されたい。
4　『富士宗学要集』（新版）第一巻六六頁。
5　同氏稿「新撰菟玖波集の性格」（『国語と国文学』昭和三十一年一月号所収）。

6　荒木良雄氏『宗祇』一一四～一一七頁。

7　『新撰菟玖波集作者部類』（『続々群書類従』第十五巻所収）による。

8　『本能寺文書』（『日蓮宗宗学全書』第二〇巻所収）二八二～二八三頁。

9　『本能寺文書』（『日蓮宗宗学全書』第二〇巻所収）二八九頁。

10　辻善之助氏『日本仏教史』中世篇之四、四〇六～四一二頁、立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教団全史』上　三三二頁、中尾堯氏稿「近衛政家の日蓮宗信仰」（『豊田武博士古稀記念日本中世の政治と文化』所収）。

11　『日蓮教団全史』上　三三三頁。

12　『日蓮教団全史』上　三三五頁。

13　『日蓮教団全史』上　三三二～三三九頁。皇族・貴族の子息を本寺貫主として招請したり、入寺させたりすることの教団側の事情を示す史料として、近世初頭のものではあるが『妙蓮寺祖師記』（『日蓮宗宗学全書』第二十三巻所収）がある。作者は日澄なる人物で慶長十一年（一六〇六）の成立。内容は京都妙蓮寺再興の経緯と歴代貫主の略伝である。その中、再興の中心人物である仏性院日慶が、再興した妙蓮寺の貫主を選任する際「四姓出家共成ニ釈種一、雖レ然親覧ニ僧中一依ニ俗姓高下一有ニ参内之遅速一、今且撰ニ其姓一須レ為ニ寺務一」という配慮から日応（庭田家の出身）を招請したことを記している。京中に寺院を構え、それが門流の本寺として存在しているならば、対社会的な部分で門流運営上、公武との交渉は不可避であり、こうした形での縁故を結ぶ必要も、信・未信を問わず存在したであろう。また、諫暁活動を行うにしても、庭中強訴以外は、多くの縁故を用い、中介者を立てねばならなかったから（『日什御奏聞記録』（『日蓮宗宗学全書』第五巻所収））、公武との交渉は多分に教団側から意識されていたであろうと思われる。

14　『日蓮教団全史』三六七頁。

（立正大学講師）

学術大会開催予告

第三十八回学術大会は、昭和六十二年

六月六日（土）、七日（日）

の両日、**大谷大学**において開催されます。

日本印度学仏教学会